

『くらしが変えるお金の意味 アフリカと日本の地方にみる人びとの営み』 ●杉山祐子 著

くらしが 変える お金の意味

アフリカと日本の地方にみる
人びとの営み



杉山祐子 編
小川了 鶴田格
坂井真紀子 友松夕香
阪本公美子 山本志乃
白石壮一郎

お金がないと暮らしていけないというのを日々実感しつつも、お金ありきの暮らしになっただけとはいえないと感じることはあります。だからと言ってお金がなくては…となってしまうのですが。そうした中で本書に収録された論文では、お金を介在させた関係であっても必ずしもお金の論理が全てではないという事例をアフリカと日本から紹介してくれます。

例えばガーナにおける商品作物であるシアナツツの収穫についての論文では、自分に収穫の権利がない場所でも、正当な権利を持つ者を出し抜いて収穫に行くという報告がされています。こう聞くと無秩序な収穫物の奪い合いが行われているようにも思えますが、そういうわけではありません。朝一番に他人の場所で収穫してしまうことは「盗み」、昼間以降は「残り物」という認識がされていたり、たとえ「盗み」であっても収穫物の「分け合い」という考え方に転化させてしまうとも言われています。落ちていたシアナツツの「盗み」行為については貨幣経済の理屈とは一線を画した読み替えが行われるのが興味深いですね。またカメルーンの定期市の論文ではアジュール

としての面が強調されており、誰でも自由に参入でき様々なひとの居場所となっていることが報告されています。一方で本書では日本の定期市についての論文もあるのですが、参入障壁の低さやそれぞれに得意客が付いている、あるいは売り手がまた買い手にもなるという点でカメルーンのそれとよく似ている点があったりもします。その他にも様々な事例が紹介されていますが、本書を読むと、貨幣経済と伝統的あるいは地域的な決め事をうまく両立させることによって、必ずしもお金第一ではない自律的な暮らしを営むことができるということが伝わってきます。それは私たちがお金第一の生活から抜け出すひとつの道筋も示してくれます。

（副隊長）

◆2500円・A5判・341頁・弘前大学出版会・青森・202603刊・ISBN9784910425207

※本記事は、株式会社地方・小出版流通センターの提供によるものです。本記事の掲載および利用は、当該ページに限り、株式会社地方・小出版流通センターの許諾を得て行っています。

無断での転載、複製、転用は固くお断りいたします。

【 問合せ先 】 弘前大学出版会

TEL. 0172-39-3168

e-mail. hupress@hirosaki-u.ac.jp